第15回　日本言語文化学研究会報告

昨年１２月６日におこなわれた第15回日本言語文化研究会では、５名の発表者による発表がおこなわれました。

三村由美さんによる「日本語のアスペクト・テンスの習得」は初級・中級・上級学習者121 名を対象に日本語のアスペクト・テンスがどのように習得されているかを調査したもので、統計的手法による結果処理がなされました。

続く近藤彩さんの発表は、「ビジネス上の接触場面の研究」と題され、極めて研究が少ないとされるこの分野において外国人の問題意識が明らかにされました。また外国人の属性によってその問題点に違いがみられることも明確にされ、ビジネス場面でも異文化間問題が存在することが強調されました。

３番目の朴蓮淑さんの『新御伽婢子』考は、刊行以来十分な研究がなされないまま作者の見聞談と概ねみとめられている『新御伽婢子』について典拠を探った研究で、その現実的な怪異性から、素材は身辺の珍談奇談や「因果物語」などの文献から集めたとの推論がなされました。

後半一人目の渡辺由美さんの「第二言語の読解における母語使用の意味」は、英語を母語とする日本語学習者に、物語文の読後に日本語と英語の双方による自由再生を課して、再生プロトコルを比較したものでした。また読解中の母語によるメモの分析から読解過程における処理を探る試みがなされていました。

最後の発表は陳明涓さんの「フレームにみられる文化的差異」でした。この研究は、同じ３つのテーマで討論した日本グループと台湾グループの音声テープを文字化したデータを比較して、それぞれの「テーマの移行」へのパターンを明らかにしたものでした。発表の際にも視覚的にわかりやすいパターンの提示がなされました。

今回もテーマ・手法ともに様々な研究発表となりました。機器の使い方など、更に工夫されたわかりやすい発表を望む、との声も聞かれましたが、それぞれに充実した内容でした。

（内田）